

「多くの人の笑顔のために」

- 重症心身障がい、難病、長寿医療を柱とし、地域に密着した専門医療を提供します。
- 社会的なアプローチを組み入れ、患者中心の心あたまる医療を実施します。
- 臨床研究、教育研修、安全管理をととして常により質の高い医療を追求します。
- 公益性を確保し、効率的で自立した病院経営を推進します。



健康長寿の集い
～ 講演と健康相談の様子 ～

重症心身障害児(者)病棟の風景の変化

新型コロナウイルス感染症の世界的流行の影響も薄れてきて、当院に於ける外部との交流状況にも大分変化が見られています。

ご家族の面会についても大分条件が緩和されました。まだ以前の状態までには戻っていませんが、それでも毎日の様に面会に来られる方の姿を拝見出来る状況が段々当たり前の風景になってきたのも事実です。

当院の重症心身障がい児(者)病棟には100人近い患者さんが入所されていますが、私達の提供するサービスは、医療面は勿論ですが、それとともに大事なのが福祉的側面のサービスです。その際に重要なのが、何と言っても御家族との信頼関係の構築と言えます。その絆を深める意味でも、御家族と職員との親密な交流が必要となってきます。

今後面会だけでなく、患者さんにご家族を交えた様々な行事の開催などまで出来る様になって、更なるサービスの向上につなげていける日が来るのを首を長くして待っている今日この頃です。



診療部長
川満 徹

もしものときの備え

～備えあれば憂いなし～ 第2章 お食事編

5階病棟看護師長 井之上 妙香

あわら市の高齢化率は34.7% (2023)で全国平均より大きく上回っており、当病棟の入院患者さんの平均年齢は81.96才(2023)で、食べ物を飲み込む機能に年齢性変化を来し、食べることが困難になってくる患者さんに多く出会います。そんな時、可能な限り食事を楽しみ自然な形で栄養の摂取に向けて、誤嚥のリスクを最小限にできるように病棟では食事形態や、食事の姿勢、一口の量、食べる速度、食べ物の温度等へ工夫をおこなっています。また、口腔ケアにより肺炎を予防し、少しでも経口からの栄養摂取が継続できるような援助に努めています。

います。しかし、あらがえず食べることが出来なくなった時、経鼻胃管栄養、胃瘻、末梢点滴、中心静脈栄養等、それを行うか行わないか。その時には、ご本人の思いを知ることが困難なケースがあります。日常の中で患者さんご家族がACP(アドバンス・ケア・プランニング)について話し合いの機会を持つことが大切となります。患者さんの人生観や生死観を常に意識し、患者さんご家族が最善の選択が出来るように、ACPに基づいた意思決定支援に努力して参りたいと思っています。



リハビリテーション科:体制を強化しました

理学療法士長 仲山 卓志

リハビリテーション科では理学療法士・作業療法士・言語聴覚士の国家資格をもつ専門職を配置しており、令和6年4月からは理学療法士1名、作業療法士2名を増員し体制を強化しました。

理学療法士は、起きる・座る・立つ・歩くなどの基本的な動作や呼吸・循環機能など身体機能の維持改善を支援します。

作業療法士は、食事・着替え・トイレ・入浴などの日常生活動作能力の維持改善の支援や、意思疎通が難しい方が機器を用いて家族や周囲の方々とつながることができる環境整備を行っています。

言語聴覚士は言葉やコミュニケーション、食べる・

飲み込む機能の維持改善を支援しています。

当院の病院機能である重症心身障がい、難病、長寿医療においては、患者さん個々の病態や障害像は様々であり、求められるリハビリテーション医療も多岐にわたります。

今後も、患者さんの身体的機能の回復と精神的・社会的な活動の支援だけでなく、ご家族や周囲の方々も含めた患者さんを取り巻く環境をより良いものにしていくことを目指し多職種と連携し取り組んでいきます。



重心医療と呼吸管理

小児科医長 大坂 陽子

障がい者病棟には、中枢神経障害により自発呼吸不十分、体幹の変形のため十分に胸郭が動かず換気量を保てない、気道炎症を繰り返して有効なガス交換が出来ないといった、呼吸不全の患者さんも入院しています。彼らの呼吸状態を把握するため、モニターでの呼吸監視に加え、努力呼吸の有無、低酸素状態による不機嫌、二酸化炭素貯留による反応の鈍さなどの変化を見落とさないよう注意深い観察を行っています。

呼吸不全の病態にはⅠ型(低酸素血症)とⅡ型(高二酸化炭素血症)があり、Ⅱ型呼吸不全にはNIPPV(非侵襲的人工換気)などで対応します。NIPPVを装着した患者さんに、モニターや検査の数値改善だけでなく日中の笑顔が増えたのを見ると、「楽になった」のを実感しま

す。緊張が強くてマスクでのNIPPVが困難な方には、ハイフローセラピーで軽いPEEPをかけてガス交換を保障出来た例もありました。

慢性呼吸不全の患者さんが安楽に過ごせる呼吸補助は重要な課題ですが、現在は臨床工学技士がチームに加わり、さらに安定した呼吸管理が可能になりました。

気管切開が必要な場合は、高次医療機関の耳鼻咽喉科専門医への相談を積極的に行います。変形が強い患者さんは気管腕頭動脈ろうなどの合併症のリスクが高まるため、いずれにしろ長期の呼吸管理の治療方針については、ご家族や病棟スタッフとよく話し合います。





地域医療連携施設のご紹介



あわら病院と連携している医療機関等をご紹介します

社会福祉法人 生喜庵

生喜会は「みんなで支え合い、その人らしく自分らしく」を法人理念とし、平成26年に地域密着型介護老人福祉施設、短期入所生活介護、定期巡回・随時対応型訪問介護看護、居宅介護支援事業、サービス付き高齢者向け住宅、平成29年に住宅型有料老人ホームを開設しました。地域の皆様とのつながりを大切にしながら信頼される住まいづくりを目指しています。利用者様の意思を尊重し、入居されてからもその方らしく、安心・安全に毎日の生活が出来るようご支援にあたりるとともに、利用者様を支える家族様との連携も密にとりケアにあたっています。

人と人との関係性の希薄化が進み、高齢の方を取り巻く環境も多様となる中、ご支援にあたりこれまでの枠の中だけで考えるのではなく、専門性の向上を図りながら、その方々に合った質の高いサービスが提供できるよう努めています。今後も個別のニーズを把握しながら地域の皆様に寄り添える施設づくりをおこなっていきます。お困りのことがございましたらお声掛け下さい。宜しくお願い致します。



社会福祉法人 生喜庵
〒910-0273 坂井市丸岡町長畝16字ハツ割3-1
TEL (0776)68-0058
FAX (0776)68-0018

災害訓練を通して考えること

今年度アイリスではお正月におきた能登の大地震を想定した災害訓練を10月に行っています。実際にアイリスの事務所から病院の待合室あたりをヘルメット姿の看護師が拡声器で声を張り上げている所に遭遇された方もいらっしゃるかと思います。診察を待つ中、少し大きなヘルメットを揺らしながら駆けていく看護師に検査科や放射線科の職員が手を挙げ、返答する様子はいささか滑稽にも見えたかもしれません。シナリオを作成し本番さながらに動き、周りの目を気にすることなく訓練させていただきました。ここまでするのは、震災の復旧が進んでも長年住み親しんだ我が家を失い、いまだ慣れない場所で心細く療養される方達が沢山いる事、さらに怖いことに、日本各地どこに居ても大きな地震が起きるかもしれない、などとワイドショー

訪問看護ステーションアイリス 副看護師長
在宅ケア特定認定看護師

藤代 直美

でも取り上げられるなど、地震への備えが重要だと考えるからです。

私達訪問看護師は利用者さんの療養を支援するという使命があります。そのためには災害後であってもいつものように訪問できる体制をとることが重要になります。しかし実際に行ってみると医療処置が必要な方、独居の方、高齢者世帯の方への訪問をどの様に行うか、道路状況の情報はどうしたら得られるか等毎回新たな課題に気づかされます。課題は沢山ありますが、私達はアイリスを利用される方とそ

のご家族が少しでも安心して療養できることを目指し精進していきたいと考えています。



外 来 担 当 医 表

(令和6年12月2日現在)

診療科		月	火	水	木	金
総 合	内 科	見附 保彦	見附 保彦	大槻 希美	鈴木 友輔 ^(第1・2・3・5) 見附 保彦 ^(第4)	海野 優矢
	小 児 科	川満 徹 *	川満 徹 *	川満 徹 *	福井大学医師 ^(第1・3・5) * 福岡 諒 ^(第2・4) *	川満 徹 *
専 門	リ ウ マ チ		津谷 寛		津谷 寛	
	血 液 ・ 腫 瘍			浦崎 芳正 *		大槻 希美 ^(第2・4)
	生 活 習 慣 病			鈴木 友輔 ^(第2・4)		伊藤 和広
	老 年					栗田 敦 ^(第1・3・5)
	神 経			浅野 礼 ^(第1・3・5)		
	循 環 器			見附 保彦	見附 保彦	
	外 科	斉藤 貢	斉藤 貢	斉藤 貢	斉藤 貢	斉藤 貢
	整 形 外 科	柳 裕				
	眼 科				吉岡 達也 *	
	皮 膚 科		若原 真美 *			
	地 域 ケ ア	鈴木 友輔 *				
	禁 煙 外 来	見附 保彦				

● 受付時間(午前診療)8:40~11:30 ● 黄色枠は予約制 ● *印は午後診察 ● 休診日/土・日・祝日・年末年始

※皮膚科の診察は、火曜日の13:00~15:00(受付時間14:30まで)です。

※神経内科の診察は、第1・3・5水曜日(受付時間8:40~11:30)です。

※最新の医療体制についてはあわら病院ブログ「診療体制の最新情報」をご覧ください。



「指差し呼称」の実践

医療安全管理係長 細坪 美貴

指差し呼称とは、元は日本国有鉄道の蒸気機関車の運転士が、信号確認のために行っていた安全動作でした。現在では航空業、建設業など幅広い業界で行われています。人間の意識レベルを5段階のフェーズに分けた「フェーズ理論」によれば、対象を指で差し声に出して確認する行動によって、意識レベルを脳が活発な状態に引き上げる事ができるとされています。病院では薬剤投与、検査の実施等、間違いが許されない場面があります。忙しい状況での確認場面で、指差し呼称を行うことは、ミスを防止するために大変有効な方法であり、今年度は指差し呼称の必要性和実施方法についての研修会を実施しました。しかし勉強会実施後に行った実施観察にて、指差し呼称実施割合は増えなかったとの研究報告もされており、1回での定着は難しいようです。今後ラウンドや、エラー防止を体感できる研修等を行い、医療安全に努めます。



薬剤科便り

薬剤科 調剤主任 中山 実智恵

国の方針により、2023年1月から全国的な電子処方箋の運用が開始となりました。電子処方箋とは、今まで紙でやりとりしていた処方箋のデータを電子化し、オンライン資格確認等システムを基盤とした電子処方箋管理サービスを介して、医師・歯科医師・薬剤師間で処方・調剤情報や、疑義照会等の情報連携を可能とする仕組みのことです。あわら病院でも2025年2月からの運用を目指しています。電子処方箋を活用することによって、重複投薬や併用禁忌などのチェックが可能となり、より良い診察・処方・調剤・服薬指導ができるようになると期待されています。薬剤科でもスムーズな電子処方箋の運用にむけて準備をすすめ、地域の患者さんへのより良い薬物治療の提供に努めてまいります。



独立行政法人

国立病院機構 あわら病院

福井県あわら市北潟238-1

TEL.0776-79-1211 (代表) FAX.0776-79-1249

〈地域医療連携室〉FAX.0776-79-1261

URL <http://www.awara-hosp.jp/>

交通のご案内

えちぜん鉄道「あわら湯のまち」駅より(約5km) 乗合タクシー [事前に登録が必要です]

ハピラインふくい線「芦原温泉」駅より(約10km) 乗合タクシー [事前に登録が必要です]

※乗合タクシーを利用するためには事前に登録が必要です。

乗合タクシー(デマンド交通)は、お電話一本で、停留所から目的地の近くの停留所まで直接行けるシステムです。

《お問い合わせ先》あわら市役所 生活環境課 生活グループ 0776-73-8017